

# そだちサポートプロジェクト 令和8年度 第1回 そだサポ研修&交流会

令和 8年 6月12日 (金) 18:30 ~ 20:00

## ○ 参加事業所 (事業所数)

### 奄美市 (5)

にこびあ、のぞみ園、  
ヒマワリクラブ、ヒマワリ就学塾  
メロウキッズ

### 瀬戸内町 (2)

ここ園、みらいはうす

### 龍郷町 (2)

愛かな、聖隷かがやき

### 喜界町 (1)

てくてく教室

### 与論町 (1)

ほのぼの

### 鹿児島 (4)

おひさま、ことりの、にじいろ、のびのびパレット、もりのね

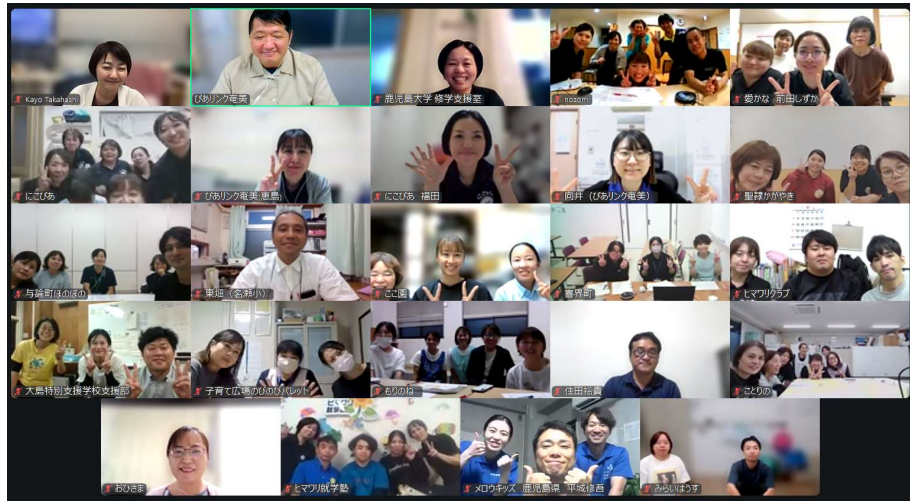
### オブザーバー (6)

住田氏 (国分西小)、上田氏、鶴田氏、(大島特別支援学校)、井料氏、吉元氏 (大特支徳之島)

### 講師/事務局 (5)

今村氏、高橋氏 (鹿児島大)、福崎、恵島、向井 (びあリンク奄美)

合計 74名





## 1.各事業所自己紹介

## 2.ミニ研修 (別紙資料)

### 「共生社会を目指して生涯発達を考える①共生社会のかたち」

～支援者による支援から”ともに生活する”地域へ～

<p>鹿児島大学大学院 臨床心理研究科</p> <p>准教授 <b>高橋 佳代</b> 氏 准教授 <b>今村 智佳子</b> 氏</p>	<p>共生社会とはどんな社会だと思いますか？</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>年齢</li> <li>性別</li> <li>国籍</li> <li>文化的背景</li> <li>障害の有無</li> </ul>	
---	---	---

### 3.交流会

#### 【1G】

- 愛かな
- ヒマワリクラブ
- メロウキッズ
- 与論町のぼの
- もりのね
- 住田氏（国分西小）
- 井料氏（大特支徳之島）
- 恵島（ぴあリンク奄美）



#### 【発表：永田氏（もりのね）】 ※住田氏補足

・インクルーシブ教育が浸透し、将来的には「放課後等デイサービス」や「児童発達支援」といった枠組みそのものが不要になるのが理想的であるとの意見も出されたが、現状では、これらの専門機関が学校現場とより密接に連携・参画していくことが大切ということを確認。

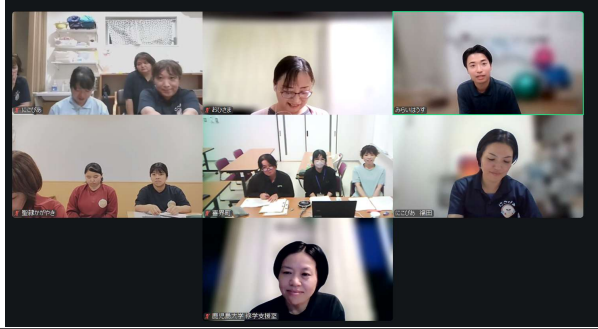
・奄美地域における「B&G海洋センター」などの施設が、障害のある子どもたちの活動場所として積極的に受け入れを行っており、利用者にとって大きな助けとなっているという事例を共有。

・地域での就学を希望しても、県側から適切な就学指導ではないとみなされるケースがある。現場では学校の体制や管理職の考え方、職員間の認識差などにより、インクルーシブ教育の実施に軋轢が生じることがある。

・学校がインクルーシブ教育にどう取り組んでいるかを確認する術として、「学校のグランドデザイン：特別支援教育に関する項目が含まれているかを確認する。」「学級経営案（学級PTA等で配布）：担任教諭が特別支援教育をどのように位置づけているかを把握する。」の2点が示され、これらの情報を確認することが、学校現場におけるインクルーシブ教育の現状を理解し、今後の連携を考える上で重要な視点になると示唆された。

#### 【2G】

- にこびあ
- 聖隷かがやき
- みらいはうす
- 喜界町てくてく教室
- おひさま
- こたりの
- 吉元氏（大特支徳之島）



#### 【発表：西根氏（みらいはうす）】

・「インクルーシブ社会」や「ノーマライゼーション」といった大きな概念を一度に実現することはハードルが高いという意見もあったが、まずは「目の小さなことから変えていく」というアプローチを重視することを確認。

・子どもへの声かけ一つを取っても、「大人の意図で選択肢を狭めていないか？」と自問自答するなど、日々の関わりを見直すことが重要であるということを確認。

・奄美の豊かな自然環境を活かした活動など、身の回りの資源を活用してできることを、少しずつ積み重ねていく姿勢が大切

・障害の有無に関わらず共に過ごすためには、支援する側の人員不足が課題である。

一方で、専門知識を持つ先生たちが同じ現場に集まり連携することで、より豊かな環境が作れるのではないかと前向きな可能性についても議論された。

社会制度そのものの変革には時間がかかるため、まずは自分たちができる身近な実践から丁寧に取り組んでいきたい。

#### 【3G】

- のぞみ園
- ここ園
- ヒマワリ就学塾
- こたりの
- のびのびパレット
- 大島特別支援学校
- 東畑氏（名瀬小）
- 向井（ぴあリンク奄美）



#### 【発表：西迫氏（おひさま）】

・インクルーシブ社会の実現にはまだ高いハードルがあるものの、地域にある利用可能な資源（インクルーシブ公園やバリアフリーのレジャー施設など）を積極的に活用していく重要性を共有。

・研修会などを通じて地域との交流を深め、自分たちにできる支援のあり方を模索していく姿勢を確認。

・奄美と鹿児島がオンライン等でつながり、関係を深めていくことは、子どもたちへの「切れ目のない支援」を実現する上で大きな力となる。

・重度の障がいがある生徒との旅行を実現したという特別支援学校の事例で「無理だ」と諦めそうになる場面でも、諦めずに交渉を続けることで協力してくれる方も増え、拓ける景色があったというお話は、グループメンバーにとって大きな希望と感動があった。

・一人ひとりの「好き」や「その子らしさ」を大切にすることを重視し続けることの重要性を再確認した。